

ミュンヘンの文学散歩 (6)

佐野晴夫

31. クラブントの旧居 (Kaulbachstr. Nr. 56)

ルートヴィヒ街、レオポルト街の東を平行して通じる街路カウルバッハ街を南からやって来るとき、小綺麗なパリの裏通りを散策するかの様な心地がする。リカルダ・フーフの後屋、ピヤバウムの下宿のほか、カウルバッハ街の56番地にはクラブント、63番にはレーヴェントローが仮住まいした建物が残っている。また「ヨーロッパの没落」の著者として日本人に馴染みのオスヴァルト・アルノルト・シュベングレー (1880-1936) もこの街の住人であった。

クラブント (Klabund, eig. Alfred Heuschke, 1890-1924) はミュンヘン大学でも哲学及び文学を学んだこともあるので、A・クツチュゲやK. F. ヘンケルによって創設された詩人グループ「若きワニ」に出入りした。彼のミュンヘン時代については「私はやって来た、そして私は去る」(1903)、彼の<シュワーピングのラブ・ロマンス>である「マリエッタ」(1910) だろうか、い知ることができる。

32. レーヴェントローのうたかたの住居 (Kaulbachstr. Nr. 63)

筆者が滞在した1980年の冬の夜、テレビ番組でシュワーピングを舞台にする余りにも自由奔放的な女性を主人公にする「ミュンヘン風自由恋愛」という物語を観たとき、明確なモデル名が挙げられていたわけではないが、北独フーズムに生まれ、1892年から1909年までミュンヘンで学び、生活したフランツィスカ (本名ファニー)・グレーフィン・ツー・レーヴェントロー (Franziska < eigentlich Fanny > Gräfin zu Reventlow 1871-1918) を思いうかべた。この女流作家は、世紀転換期のシュワーピングのボヘミアンの象徴であった。また彼女は「日記 (1895-1910)」(1971)、小説「エルレン・オレスチエルネ」(1903) や「ダーメ氏の手記」(1913) の中で、第1次世界大戦前のミュンヘンにおける精神世界のひとつの像を与えた。そしてシュワーピングを語呂遊びするかのようにな「Wahnmoching」と別称で彼女は呼んだ。

日記によると、1908年のクリスマスに、フランツィスカ・グレーフィン・ツー・レーヴントローは11歳になった息子ロルフとともにヘルムトゥルーデン街5番（Helmtrudenstr. Nr. 5）へ転居し、自分達の運命が好転することを願っている。北欧の古い名家の伯爵令嬢に生まれながらも、デンマーク国王や僧会議員の愛人ともなった女性は、メルヘン風に雪の積もった日には、子供と一緒に六百メートルと離れていない英国庭園を横切り、クラインヘッセローエル湖へ出かけて、一日中ソリ遊びに熱中したり、またある日には、クリスマス・ツリーのまわりを子供と共に踊ってみたり、ガチョウの焼き肉料理に取りかかり、大いなる幸福感を味わっている。年越えて、1909年のファッシングの季節となると、彼女は様々の仮装舞踏会場では注目の中心女性であった。早朝まで彼女のお供をして楽しんだ者は、大抵、彼女の自宅で朝食のサービスをうけた。この謝肉祭の季節、毎夜、別の奴隷にかしずかれる女王の様に見えた。彼女は当代では類の無いほど内的に自由で自然な人であり、トーマス・マンの弟ヴィクトルの言によれば、「馥郁たる香りのする女性⁽⁴¹⁾」で美しく優雅な魅力に富む様に映った。

彼女が移り住んだかりそめの旧居のうち、カウルバッハ街63番以外にもレオポルト街41番に記念版が掲げられている。ここがミュンヘンで最後の住まいである。1909年の冬、彼女が優しく「坊や（Bubi）」と呼んでいた息子ロルフはしょうこう熱やら、肺炎やらにかかりながらも、一命をとりとめた。息子の気持を元気づけようとして、復活祭には卵で子うさぎを沢山作ってやったり、春にはオーバーフェーリング近くのイーザル河畔へハイキングに連れて出たり、初夏には英国庭園の池でボート遊びをしたりした。真夏を母子がキムゼー湖で過ごし、10月2日に帰宅すると、家主と管理人が転居をせまったため、レオポルト街41番にミュンヘンで最後の仮宿を見つけることになった。そしてやがてミュンヘンからテッシンへ転出して行った。

余談ながら、ヘルムトゥルーデン街5番には、数年後、演劇研究家アルトゥール・クッチャー（1878-1960）が入居している。

33. 蟄居するオスヴァルト・アルノルト・シュペングラーの仮宿

シュペングラーは大学や国立図書館に近いカウルバッハ街に下宿を見つけ、家主のおばさんを母親の様にしたい、その息子の詩人と生涯親交を続けた。彼は主著「ヨーロッパの没落」を1918年から1922年にかけて執筆したが、1936年5月8日に死亡し、北墓地に埋葬された。

彼は国家行為や国家意志の執政官ではなかった。彼が書き記している様に、時代の主張や意見に惑わされることなく、ひっそりと、高潔なたたずまいの中にも、一般市民の様に生活した。大多数の主要な人物の同じようにドイツ市民社会の出で、ドイツ的価値を倦むことなく備えた人柄であり、個人生活では質素なうえ、殆ど古風で、金儲けに走ったり、借金に走ったりすることなく、また北独人特有の重厚な性格を持つが、企業家や野心家の様でもなく、また名声欲や名誉欲を求める人物ではなかった。人目を避けるように、アルプス山地の展望のさく下宿屋にひっそりと暮らしていたので、彼の住居を殆ど誰も知らないなかった。

1922年（大正11年）、ホテル四季館に宿泊中の日本の歴史学者のひとりが約束もしないで突然秋雨の中訪ねた先も、騒々しい芸術家の巢窟でなければ、瀟洒な邸宅でもなかった。訪問者とは坂口昂であり、訪問先はアグネス街54番の3階であった。「さて主人は、まず、日本人によって訪問され、日本人と対話するのは、今晚が初めてであるとして、快く話の端緒を開いた。しかし彼は殊更に愛敬を作る者ではない。彼から微笑の一瞬だも認め得なかった。彼の態度は全く率直真摯であった。彼は黒みがちな大きな両眼をきらきらと光らし、弁舌流暢にして力強く、論理亦た明晰によく談ず。彼は、私の問に応じて、彼の『没落』は第2巻で完結した、今は他の新しい研究に向かっているといふ。話次は、自然、極東のことに及ぶ。⁽⁴²⁾」なお、彼の別の旧居がヴィデンマイヤー街にある。

34. 4階建てのカウルバッハ別邸（Kaulbachstr. Nr. 15）

フリードリッヒ・アウグスト・フォン・カウルバッハの館は、画家の持ち物として、ミュンヘン市中では、レンバッハの館に次いで2番目に大きな豪邸であった。カウルバッハは、ここに別邸を1887年より2年がかりでガブリエル・ザイドル（1848-1913）に建てさせた。この館で季節毎に王侯、貴婦人、資産家や美術研究者が参集した。そして彼に肖像画を描いて欲しいと願ったのは、とりわけ王女、伯爵夫人、大使夫人、令嬢といった女性たちであった。彼の女性像は、さほど独創性に富むわけでもなく、甘美で、ほのかな微笑と微かな陶酔につつまれ、満ち足りた安息と冷やかな優越の感情が浮かんでいる。また彼がデッサンした男性肖像画には、皇帝ウイルヘルム2世、ペッテンコッフェルや彼自身の父親といった少数にすぎない。

古典的趣味に欠けていないこのカウルバッハ別邸は、第3帝国時代にはナチ

スの大管区司令官アドルフ・ワーグナーの所在地となり、下って、戦時中破壊したこの別邸が修復されると、アメリカ軍兵士のための放送局AFNに接收されるうき目に遭うのである。

35. レオポルト街59番のハインリッヒ・マンの住まい

ふたたびレオポルト大通りに戻ってみよう。骨の髄までシュワービング児であるヴィクトル・マンの長兄ハインリッヒ・マン（1871-1950）も1893年から1928年の間の大部分をミュンヘンで過ごし、弟トーマス等とともに20年代ミュンヘンを文化の中心にすることに尽力した。彼の業績は雑誌「二十世紀」の編集者としての仕事ばかりでなく、「愛の狩猟」（1903）や「ヴェデキントの思い出」（1923）といった執筆活動でも反映されている。彼にとって思い出に残る住まいのひとつは、レオポルト街59番の建物であった。

36. レオポルト街10GGのウイヘルム・ヘルツォークの旧居

ベルリンで生まれ、ミュンヘンで逝去した抒情詩人にして戯曲家のウイヘルム・ヘルツォーク（1884-1960）は、第1次世界大戦前に雑誌「三月」の編集に携わるために南独の都を訪れた。以後、文学雑誌「牧神」（1909-10）、政治雑誌「フォルム」（1914-15）等の発刊にも従事している。後者は1915年に戦争反対の態度をとったかどで発禁のうきめにあった。1933年には亡命を余儀なくされたが、第2次世界大戦後ふたたび亡命地よりミュンヘンへ戻り、活動した。その拠点となったのがレオポルト街10GG（Leopoldstr. 10G. G.）の住居である。いまひとつはフローラ街7番（Florastr. 7）である。なお、彼の永遠の安息の地は北墓地にある。

37. ギーゼラ街7番のヨーゼフ・リューデラーの寓居（Giesela Str. Nr. 7）

レオポルト街とカウルバッハ街とはさまれ、かつ両者を結ぶ幾本もの街路がある。ミュンヘンに生まれ育った自然主義の小説家で戯曲家であったヨーゼフ・リューデラー（1861-1915）は、あまり日本人に知られていないが、マックス・ハルベと共に「居心地よい劇場」や文学結社「仮政府」の設立者でもあった。地元の人達にとっては、彼の「軍旗授与式」（1895）の初演でもって現代バイエルン文学が設立され、これをさらにルートヴィッヒ・トーマがドイツ文学の中へ独立的な要素として送り込み、またさらなる発展をレーナ・クリスト、J. ホーフミラー、G. クヴェーリ、Ed. シュテムプリンガーが企てる契機を与

えたと見なしている。彼はかつて通った大学前から英国式庭園へ通ずるギーゼラ街7番に住んでいた。またマリア・テレジア街20番にも住んだことがある。なお墓地は森林墓地（Waldfriedhof）である。遺品はミュンヘン市立図書館に収められている。

38. マックス・ハルベとヨーゼフ・ポンテンのすごしたマルティウス街

ギーゼラ街と平行して走るマルティウス街へレオポルト街より入っていくと、マルチウス街6番（Martiusstr. 6）には、日本人にも自然主義の小説家、戯曲家として著名なマックス・ハルベ（1865－1944）の記念版が掲げられた建物がある。今日ではマックス・ハルベ協会が入居している。ハルベは1895年以降ミュンヘンに住み、F. ヴェデキント、E. v. カイザーリング、L. トーマと親交を結んだ。この地で一連の戯曲「自由恋愛」（1890）「青春」（1893）「母なる大地」（1897）「河」（1904）をはじめ、自伝「世紀かわり」（1935）「全集」（1945－50）を発表した。

またマルティウス街7番には「意志に反した詩人」と自称し、他郷の森林墓地に埋葬されることになったアーヘン生まれのフリー作家ヨーゼフ・ポンテン（1883－1940）の旧居がある。また彼の旧居あとはヤーコブ・クラール街12番にもある。

39. トラウレンヴォルフ街のベッヒャーの住宅

表現主義ばかりでなく、後にその対極に立脚する社会主義的リアリズムの代表者となったヨハネス・ローベルト・ベッヒャー（1891－1958）の住宅がトラウレンヴォルフ街6番にあった。1954年以降ドイツ民主共和国（東独）の文化大臣の若き日の家宅である。ここがミュンヘンに生まれ、医学、哲学、文学を学びすごした彼の自伝的小説「別離」（1940）「私の詩の中のミュンヘン」（1946）の青年期の舞台である。

40. パウル・クレーのアトリエがあったファイリチュ街3番

レオポルト街から近いファイリチュ街32番には文人好みのたまり場「水蓮」（Seerose, Feilitzschstr. 32）があった。シュワービングは文人ばかりでなく、画人の多くが住むところである。とりわけミュンヘンと結びついたスイス画人のアトリエもあった。

阪神大震災のせいで、1995年早春、大阪の某百貨店で展示予定であったパウ

ル・クレーの絵画展が、破損を恐れるスイスの遺族の意向で中止となり、日本の多数のクレー美術愛好家を失望させたのも記憶に新しいところである。パウル・クレー（1879-1940）は、1898年以来ほとんどずっとミュンヘンに居住した。彼の1908年12月の日記によれば、ファイリチュ街3番の家に小さなアトリエを見つけている。妻リリと息子フェリクスと暮らす住宅は別にアインミラー街32番（Ainmillerstr.32）にあり、ここは第2次世界大戦中戦災にあい、破壊された。

1909年の日記によると、クレーは新しい仕事部屋で実験的で意欲的な油絵の大作にとりくんでいる。アトリエで昼間1、2時間落ち着いて仕事をする、アインミラー街の自宅に帰り、働いている妻に代わって室内を掃除したり、子供のおむつの洗濯をしたり、食事を作らなければならなかった。千人もの画家がいるこのミュンヘンで頭角をあらわすチャンスがあるのかと、僅かの委託仕事しかないクレーは懐疑的になっていたけれども、ファイリチュ街のアトリエで最も有名なモチーフのひとつ「亀をもつ少女」が生まれている。この絵画は強烈に表現主義的な特徴をもつ。ファイリチュ街時代の幻滅はまだ終わらない。彼のスケッチ5点が1909年ミュンヘン分離派に拒絶されてしまった。ともかく、それらも同年、ベルリンには展示することが出来た。1910年、この仕事場からスイスへ56点の作品が送られ、これらはベルリン、チューリッヒ、ヴィンタートゥール、バーゼル等で展示された。注目すべきことは、このときアルフレート・クービンもスケッチを1枚入手したことである。やがてクレーの名前もミュンヘン児の口にはのぼるようになり、画商タンホイザーはクレーのスケッチ30点を展示して推奨した。1911年、とうとうワッシリ・カンディンスキー、フランツ・マルク、アウグスト・マッケやアルフレート・クービンが「青い騎士」を結成し、これにクレーも参加した。彼らとの間の往来は実に有益であった。またシュワービング時代のクレーと他種の芸術家交流のうちライナー・マリア・リルケとカルル・ヴォルフスケールには留意すべきである。軍役をスイスの郷里で果たした。彼は長い旅からミュンヘンへ戻るのが好きだったが、第1次世界大戦末期、アトリエをファイリチュ街3番からスレヌ館へ移した。因みに、ここは1919年トラーが身を潜めた小館である。

41. ヴェデキント広場と泉

ファイリチュ街を二分するようにヴェデキント広場があり、しかもフランク・ヴェデキント（1864-1918）を顕彰する「ヴェデキントの泉」が設置されている。

る。

42. ヴォルツォーゲンとトラーの歴史的エピソードを秘めたヴェルネック街の隠れ宿

カウルバッハ街が終わった辺りからファイリチュ街へ直角にぶつかる街路の9番(Werneckstr. 9)にエルンスト・フォン・ヴォルツォーゲン(1855-1934)の旧居があり、また1番の小館はエルンスト・トラー(1893-1939)の隠れ家であった。

ブレスラウに生まれ、ベルリンで小説家並びに脚本家として活躍したヴォルツォーゲンは、1893年から99年にかけてミュンヘンでは主として雑誌編集者として活躍した。後年オーバーバイエルンのプップリング村に住んだこともあるが、墓は森林墓地にある。

表現主義の戯曲家、政治評論家として知られ、それ以上にミュンヘン・レーテ共和制の指導的革命家として名高い人物トラーは、グルノーブル大学に次ぎ、第1次世界大戦で重傷を負ったあと、ミュンヘン大学にやって来た。彼のミュンヘン時代の思い出は、作品「ドイツでの青春」(1933)に散りばめられ、R. M. リンケやTh. マンとの出会い、またこのスレヌ館での自らの逮捕劇の顛末について語っている。またこの1919年の事件を主題にしてT. ドルストの戯曲「トラー」が1970年にミュンヘンで初演されている。

現在入手できるミュンヘン警察庁発行「バイエルン警察誌53号」(1919年5月15日)中に掲載された特別手配書を見ると、大逆罪で一万マルクの賞金がかけられている。ミュンヘン大学で法律と哲学を学ぶ学生トラーのコート姿の写真を添えて逮捕命令が出されている。「トラーは1893年12月1日ポーゼンのザモチンに生まれる。ブロンベルク行政区コルマル郡で、商人夫婦マックスとイーダ(旧姓コーン)・トラーの息子として。

トラーは華奢な身体つきで肺病である。この男は1.65~1.68mの身長で、瘦せて青白い顔つきで、髭をはやさず、大きな茶色の眼をし、鋭い眼差しをして、思考する際、眼をつぶり、黒っぽいほぼウエーヴのかかった髪をもち、文語調がかかったドイツ語を喋る。⁽⁴³⁾

1919年4月末レーテ制が失敗に終わったとき、市民たちは至るところにある街中の広告塔でレーテ制の大衆動員の担当者であった学生エルンスト・トラーの逮捕に対して一万マルクの懸賞金が公示されているのを讀んだ。この公示のおかげで、トラーに似た人物がいたと言うだけで、列車は停車させられ、部落

全体が包囲され、最悪の場合は、射殺された者まであらわれた。お尋ね者自身はと言えば、家を移りかわり、最終的にはヴェルネック街の1番のスレヌ館に落ち着いた。「ドイツでの青春」の思い出によれば、彼はここで3週間隠れ住んでいる。部屋の窓からレオポルト高等学校に捕らわれている人質を救出しようと窺ったり、夜わずか5分ほど春のいぶきを感じとろうと庭に出てみたりした。彼を隠してくれたのはクレー派の画家ハンス・ライヘル（1892-1958）とその妻オルガであった。館内に隠れ場所をさらに設けて、壁紙を張った戸で偽装し、またトラーは自らの髪の色を染めたので、警官隊が突入したとき、なかなか彼を発見出来ず、確認も出来なかった。公判中、死刑が云々されたときでも、トラーは、徹頭徹尾、暴力を否定する平和主義者であることをプロイセンの内務大臣が証言するほど、トラーの理想主義は何人の心をも揺り動かす力を持っていた。しかし、5年間の要塞禁固、釈放後ベルリンにおける作家生活、1933年の亡命、アメリカでの自殺という苛酷な運命が彼には待ちうけていた。

トラーが隠れ住んだ館はパリ近郊のスレヌ城に因んで名付けられたが、ここに建築師フランツ・クサーファー・イグナーツ・フォン・ヴィルヘルムが亡命中のマックス・エマヌエルの官房秘書官として1713年しばらく居住した。この館はヴェルネック小館とも呼ばれる。1713年から1718年の間に、多分B.グネッツハイナーによって建造されたものである。19世紀初頭には古典主義形式で、19世紀後期には新ルネサンス形式に改造され、1925年には新古典主義へ改造された。1944年から2年間徹底した改築の手が加えられ、現在、カトリック・アカデミーの持ち物となっている。

43. ルドルフ・シュナイダーの仮寓マンドル街10番b

ヴェルネック街よりさらに少しばかり東へ歩を進めてみよう。英国庭園に面した次の街路がマンドル街である。

1945年、ドイツ・ペン・クラブの書記に選ばれたアントワープ生まれのルドルフ・シュナイダー（筆名ドルフ・シュナイダー＝シェルデ 1890-1956）は、ドイツで学校生活を送った。40年以上もミュンヘンで主として喜劇作家として過ごしたが、彼の作品はナチスから発禁のうきめに遭った。彼の旧居のひとつがマンドル街10番b（Mandlstr. 10b）である。

44. アルフレート・クービンの愛の巣マンドル街26番

1904年春、画家で図案家でもあったアルフレート・クービン（1877-1959）は

死にたいほどおちこんでいた。と言うのは、内妻エミ・バイヤーが死んだばかりだったからである。けれども少し時が経つと、素敵な女性達のひとりに寄りかかられている彼の姿が見られるようになる。3月28日には婚前旅行へ出かけて行った。相手の女性は若い未亡人ヘートヴィッヒ・グリュントラーであった。2人は5月にマンデル街26番へ移って来、同年9月22日に正式に結婚式を挙げ、そして同所に1906年10月まで住んだ。クービンはミュンヘンがすっかり気に入り、カーティ・コープスの「ジンプル」でしばしば飲食をし、さらにアルテ・ピナコテークを訪れて、その絵画に魅了されていた。1906年秋、彼はマンデル街を去り、ヴィーンへ旅立ったが、やがて間もなくイン河畔ヴェルシュタイン近郊のツヴィックレット館に妻と2人の女中と共に生活をはじめている。

同じくマンデル街の住人だった作家ハンス・ブランデンブルク（1885-1968）はクービンを礼儀正しいが、ずいぶん青白い紳士だ、と見ていた。

45. ケーファー街2番の Rilke の旧居

マンデル街を北上して行くと、英国庭園近くにケーファー街がある。静かな邸宅街の一角にライナー・マリア・リルケがすごした旧居のひとつがある。そこはケーファー街2番（Keferstr. 2）である。思索にも詩作にも最高の環境をもつ住宅である。

46. ケーファー街9番のフリードリッヒ・フーフの旧居

1904年より死に至るまでフリードリッヒ・フーフ（1878-1913）はケーファー街9番の住宅に親しみ過ごした。彼はここで「マオ」「ピットとフォックス」「エンツィオ」を完成した。リカルダ・フーフの縁戚のつながるこの青年の心を戸外の自然と室内の調和のとれた家具の配置が魅了してやまなかった。この家が魅了したのは、彼ばかりではなく、ハンス・ブランデンブルクも頻繁に来訪し、それどころか、ヴィル・ヴェスパーとそのガールフレンドのケーテ・ヴェンティヒもこの家に住み込んだ。当時有名だった作家ヴェスパーは、友人ベルヌスの「シュワーピングの影絵芝居」のために作詩した。

47. ベンツォルトの終の住処 シュヴェーデン街39番

レオポルト街の東部を北上していくとき、イーザル環状道路に出会う。ここを過ぎた英国庭園近くに日本の学生にもよく讀まれたエルンスト・ベンツォルト（1892-1955）の終の住処となった場所がある。彼は1919年以降作家、彫刻

家として、1953年以降演劇顧問として活躍し、作品を発表した。すぐ近くの英国庭園内には「エルンスト・ベンツォルトの道」がある。なお、彼の墳墓は森林墓地にある。

48. ケストナーが戦後住んだフックス街2番

ミュンヒナー・フライハイトでレオポルト街は北東に向かうウンゲラー街とに別れる。そこからほど遠くない教会裏のモダンな建物が、エーリッヒ・ケストナー（1899-1974）が第2次大戦後1946年初めから1953年まで住んだところである。自宅で仕事することを野暮と考えてた詩人は、ジャーナリストとしての仕事の多くや文通をシュワービングの喫茶店や飲食店で片付け、自宅では殆ど食事もしないでシャンペンとタバコにあけくれ、昼と夜を逆にしたような不摂生な生活を送っていたものの、猫達を可愛がり続けた。ドレスデン生まれのケストナーは、のんびりとしたバイエルン気質が気に入ったのか、爆破された建物以外は見られぬミュンヘン市街を自宅から見下ろしながら、この時期「ファービアーン」「飛ぶ教室」「小さな国際文通」「雪中の3人の男」等を執筆した。そして1953年ボーゲンハウゼン地区のヘルツォークパルク街の家へと転居して、死ぬまで過ごした。

未完

1995.4.15

注

- (41) Viktor Mann : Wir waren fünf—Bildnis der Familie Mann. 1976, 1979, Frankfurt am Main. S.109
- (42) 坂口昂「歴史家の旅から」(大12.7、内外出版株式会社) P.394
- (43) In : Bayerisches Polizeiblatt. Nr.53. (15. Mai 1919)
Herausgegeben von der Polizeidirektion München.